

不登校生徒へのスモール・グループ・アプローチの試み

安 部 順 子

(西九州大学健康福祉学部)

(平成15年10月31日受理)

Use of Small Group Approach for Adolescent Clients with School Refusal Syndrome

Junko ABE

(*Faculty of Health and Social Welfare Science, Nishikyusyu University*)

(Accepted October 31, 2003)

Abstract

In this paper, the validity of the small group approach for the adolescent clients who have refused to go to school is discussed. Group was carried out over about three years and four months, continuously. The members were clients which the group leader was separately related as counselor. Progress of the group was divided into 4 terms and described focusing on the motion of members in each term. The six participating members returned to school. As a result, the following things were shown. 1.) It is that group leader must grasp the uneasiness to a member's group participation. 2.) It is that group leader needs to take counselor's role in order to guarantee the mental safe feeling. 3.) "Experience about which it speaks" serves member as an opportunity to check "oneself-likeness". 4.) Group leads member to assistance experience to the others.

Key words : school counseling スクール・カウンセリング
group approach グループ・アプローチ
adolescent clients 思春期のクライアント
school refusal 不登校
safety feeling 安全感

1. 問題

思春期のひきこもり型不登校生徒への援助においては、様々な形でグループ・アプローチが活用されている。子ども達の居場所としてのフリースペース、教育センター等の適応指導教室、種々の団体が企画するキャンプ、等である。それらは、個人が抱え込んでいる悩みや問題をグループの中で開放すること、また、体験や表現を通して自己や他者への理解を深めること、あるいは対人関係におけるソーシャルスキルを獲得すること、他者への援助や支えあいを経験すること、等を通して子ども達の心理的成長を促進することを目指している。ひきこもり型「不登校」の生徒は、学校の生徒集団から退却しており、その子ども達がどのような形のグループ・アプローチであれ、グループに参加できることは大変のぞましいことと考えられる。

しかし、当然のことながら、ひきこもり型不登校の子ども達がグループに参加できるようになるまでにはいくつかのハードルがある。たいていの場合、中～長期的な個別的是たらきかけ（家庭訪問、個人カウンセリング、親面接等）を経て、グループ参加を勧めることになる。その際、子どものエネルギー、勧める時期、勧める人との関係性等によって、参加できるかどうか左右され、援助者には、無理強いせず、しかし適切な時期に何度でもはたらきかける粘り強い姿勢が求められる（安部2000）¹⁾。その結果、子どもが参加の意志を示したとしても、グループに期待する内容は子どもによって様々であり、また、不安や拒否的な感情を併せ持ちながら参加することもある。

思春期のグループの特徴としては、言語化能力が未熟であると思われることから、様々な活動がプログラムに取り入れられことが多い。活動が入っていないければ、ではいったい何をするのかという不安を、子ども達は感じるのはないだろうか。侵入される不安が強いひきこもりの子ども達には特に警戒されるように思われる。遊戯療法の発想を活かしたグループ・アプローチが功を奏する場合は多い。

クライアントではない一般生徒を対象としたグループについては、高校生を対象に、白井(1999)²⁾、本山・野島(1998)³⁾が、非構成的なグループを展開している。これらは、成人を対象にしたグループと比較すると、構造は変則的ではあるが、言葉でのやりとりでグループ・プロセスが進む、いわゆる、ベーシック・エンカウンター・グループを志向している。しかし、小・中学生については、現在のところ、エクササイズが中心の構成的グループ・アプローチによる報告がほとんどである（國分1992⁴⁾、水上2000⁵⁾、北原2000⁶⁾）。

ところで、スクール・カウンセリングの実践現場では、安部(1999)⁷⁾が指摘するように、カウンセラーが意図し

なくても、自然発生的に相談室の中にグループが生まれることが多々ある。様々な要素が入り乱れる、このようなスクール・カウンセリングの現場におけるグループを理解し、積極的に活かすため、スクール・カウンセラーには、グループの構造や過程を理解する力量が求められている。今後さらに実践を重ね、現実的状况を分析、考察していくことが必要と思われる。

このような観点から、以下に、不登校の中学生を対象とし、言葉のみで進行した継続型スモール・グループの実践例を報告する。変則的な構造を持つグループであり、メンバーの人数も少ないことから、グループそのものの凝集性は弱く、グループ・プロセスという視点からは低展開グループといえるかもしれない。しかし、言葉によるグループであったことから、思春期グループの特徴をメンバーの言葉から引き出すことが可能であった。本論では、このようなグループ体験が個々のメンバーにもたらす効果について検討し、思春期を対象とした本グループ・アプローチの実践について、その特徴とスクール・カウンセラーとしての役割を併せ持ったファシリテーター（エンカウンター・グループにおけるグループリーダー）が留意すべき点を明確化する。

2. グループ事例の提示

(1) グループの概要

期間：X+1年12月～X+5年3月まで、およそ3年4ヶ月間

場所：某市市役所内教育相談コーナー

構造：原則として週1回の継続型グループ。メンバーは時期によって、入れ替わりの（中学校卒業等のため）ある、半クローズドグループであった。時期によって、メンバーの数に違いがあり、カウンセラーを含めて3人～6人と変則的であった。

ファシリテーター（筆者）の立場：

某市教育委員会囑託のスクール・カウンセラーメンバー：

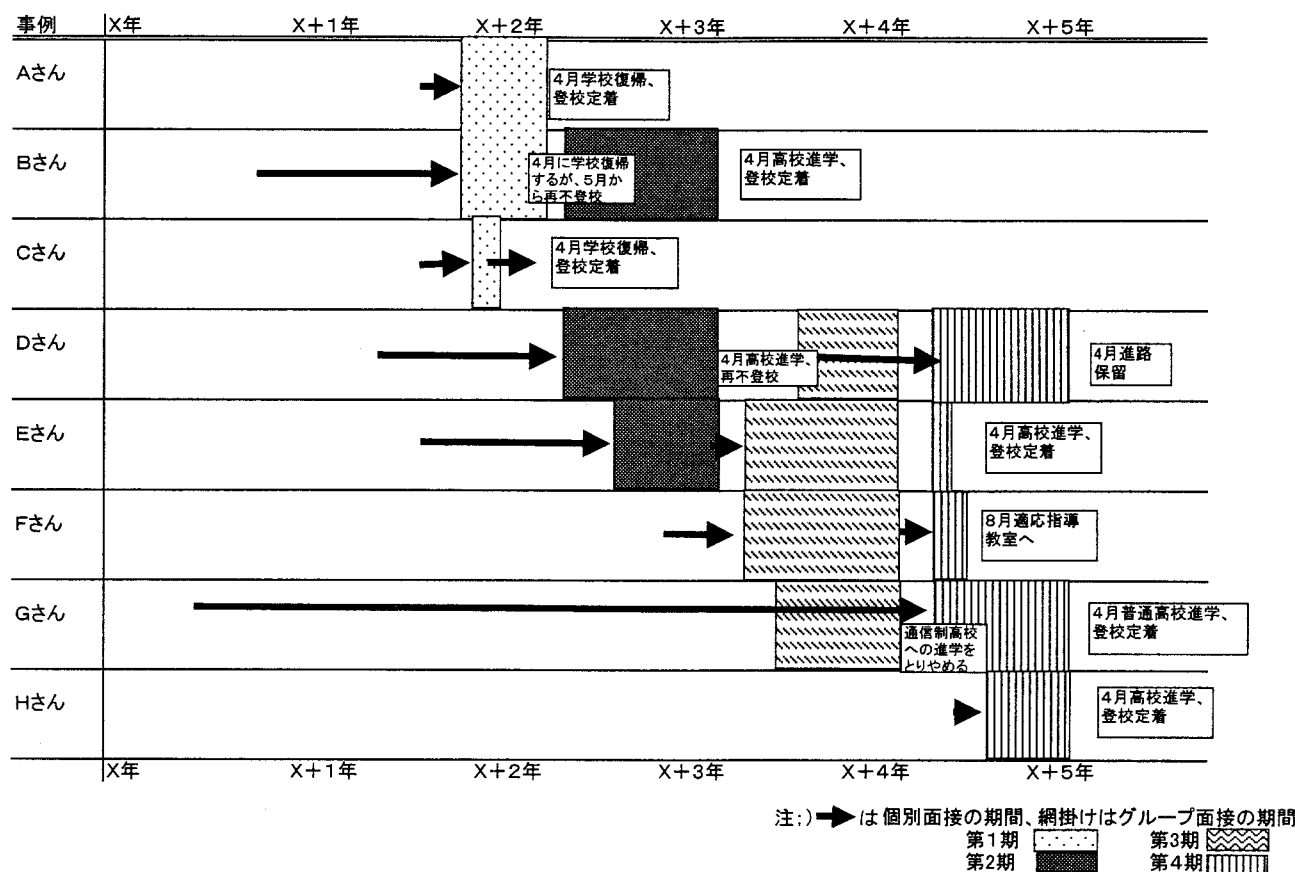
参加メンバーはファシリテーターがカウンセラーとして、個別に関わった不登校のクライアントで、全員女性であった。それぞれ、別々の学校の所属であり、市内各地から集まっていた。なお、メンバー8名のうち、6名が再登校に至っている。各メンバーの概略は表1.に示している。

表 1 事例の概要

事例	グループ参加期間	概要
Aさん	4ヶ月間（中3の12月より）	個別面接の過程で学校復帰。その後経過を報告する中で、グループ面接を提案。通信制高校に進学。
Bさん	1年4ヶ月間（中2の12月より）	個別面接では、口数少なかったが、グループの中では雄弁になる。高校進学。
Cさん	2ヶ月間（中2の12月より）	早い時期に学校に復帰する。グループの中でもはっきり意見を言う。グループより個別がよいとグループを離れる。
Dさん	1年9ヶ月（中3の6月より）	半年間の家庭訪問を経て、来談に至った事例。グループの中では聞き役が多い。高校に進学するが、留年。
Eさん	1年6ヶ月間（中2の10月より）	保健室登校が可能となり、高校進学。グループの中では自発的に話の口火をきることが可能であった。他のメンバーの発言に対して支持的に応答する様子もよくみられた。
Fさん	1年2ヶ月間（中2の6月より）	グループ面接の途中から適応指導教室へ移行する。グループの中ではおしゃべりの方であったが、遅刻や欠席も多かった。
Gさん	1年9ヶ月間（中3の7月より）	およそ2年半の家庭訪問を経て、来談に至った事例。グループの中ではカウンセラーに向かって話す形が多い。中学校卒業後、過年度受験で高校に進学した。
Hさん	6ヶ月間（中3の10月より）	グループの中で、自分の考えをよく話す。中3の3学期登校できる日が増え、高校に進学した。

(2) グループの経過

およそ3年4ヶ月間のグループ経過を4つの期間に分け、メンバーの入れ替わり等を、図1に示している。



第1期

グループのきっかけは、「ほかの（不登校）生徒はどんなふうをしているのでしょうか？」とAさんが、カウンセラーに訊ねたことであった。他の人と話してみたい、話をきいてみたいとの思いから、Aさんの提案でグループ面接が開始された。Bさんにカウンセラーが、「話をききたいと言っているひとがいるが、会ってもらえるかどうか」を訊ねると、緊張した様子ながら、ひきうける。個別面接の際、一緒に来談していた母親に、「いろいろ私が、話してあげないといけない」と、幾分緊張した様子で語っていた。（ちなみに母親面接はどの事例においても、本人との面接終了時に10分程話をする程度であった）。いざ顔合わせが終わると、Bさんは個別面接の時よりも多弁で、学校のこと、友だち関係のことなどをよく話していた。Aさんは質問したり、聞き役に回ったりしており、Bさんは自分の意見を積極的に述べていた。1期途中からCさんが、グループ面接に数回参加するが、話足りない様子で、「私はひとりで話す（個別面接のこと）方がいい」とグループを離れた。

第2期

Aさんは学年が変わり、学校に復帰した。登校は定着するが、その後もしばらくは時間の都合がつくときはグループに参加することがあった。Bさんはグループ面接をいったん終結し、学年がわりとともに、登校をはじめが、二ヶ月程で再び不登校状態となる。しばらく個別面接を続け6月から新しいメンバーのDさんとグループ面接に入る。カウンセラーが家庭訪問を実施していたDさんは高校進学について考え始めた時期に、同じ状況のBさんの話に興味を持った様子であった。さらに、秋からはEさんも加わった。Eさんは保健室登校が可能になってきた頃のグループ参加であり、保健室で他の生徒と親しくなったり、不登校経験者の体験発表を聴きにでかけたりした時期であった。カウンセラーからグループ参加を勧められると「出てみたい」と快諾する。お互い活発に話し、高校進学のこと、再登校したときのクラスメイトの反応等、ひきこもりの長かったDさんは、Bさん、Eさんの話を興味深げに聴いていた。

第3期

Bさん、Dさんが高校進学した後、Bさん、Dさんより1学年下のEさんはさらに1学年下のFさんと6月からグループ面接をスタートさせる。さみだれ登校状態であったFさんにカウンセラーが声をかけた時は、やや不安そうであったが、いざ始まってみると「おしゃれ」を共通の話題として「おしゃべり」を楽しんでいるようであった。10月からはいったんは中学を卒業し、高校進学したものの、再不登校で2度目の来談となったDさんがグループに加わる。さらに、カウンセラーが長期に家庭訪問を続ける中でグループを勧めていたGさんが「私の

まわりはおばさんばかりだから（物足りない）」と同世代グループに興味を示し、参加することになった。Gさんはひきこもりの強いタイプであり、学校以外の外出には抵抗が少ないEさん、Fさんとは違う雰囲気であった。しかし、グループの中では、話すことに飢えていたGさんは多弁であった。一方、この時期2度目の参加であるDさんはもっぱら聞き役で寡黙であり、再参加のDさん、また話足りないGさんもグループ面接以外に個別面接の時間が必要であった。

第4期

Eさんが高校進学し、グループを卒業。Fさんはさみだれ登校状態が続いていたが、適応指導教室を希望し、移行を試みる。グループの中ではFさんは他のふたりをフォローする立場となったが、話題がかみあわない感じが強かった。Fさんはしばらくグループ参加と適応指導教室の二つを掛けもちしていたが、適応指導教室に一本化。その後しばらくDさんとGさん2人の時期が続いた。その後、秋からさみだれ登校状態のHさんが参加する。Hさんは学校へ行かない時期が短く、それに伴い個別面接の期間も短かいままに、グループに参加したが、不安はあまりなさそうであった。ファシリテーターの都合でグループが終了することとなった、翌年の3月までにGさんとHさんは高校進学を決めたが、Dさんは進路保留のままであった。

3. 考察

以上のような経過を示した、本グループ実践について(1)メンバーのグループに対する期待、(2)グループの安全感(3)グループの中で「話すこと」の意味(4)メンバーの援助体験、という4つの視点からその特徴を整理し、思春期グループが効果的に展開されるために、グループ運営上留意されるべき点を含めて考察していきたい

(1) グループへの期待

本グループの特徴のひとつは、カウンセラーとしての筆者とメンバーの個別的なカウンセリングの延長線上にあったグループであったことである。メンバーにとっては、個別的な関係から、より現実的な学校集団における人間関係再構築へ向かう、中間段階の体験といえるであろう。カウンセラーが参加を勧めた時のメンバーはそれぞれに、不安と同時にいくらかの期待を持っている様子であった。

Aさんは、自分から「ほかの人はどんなふうなのか？」と言い出しており、Fさんは「同じ年のひとと話してみたい」と表現している。Bさんは「傷を舐めあうような関係は嫌だ」と言いつつ一方で、話を聴きたいというAさんに対して、「自分が教えてあげないと」との思いを持っていた。

グループ・アプローチの効果は、参加へのモチベー

ションに影響される。自発参加のグループと研修型のグループでは差がみられることが指摘されており（中田1993）⁸⁾、グループメンバーがどのような期待を持っているのかということを知ることは、ファシリテーターとしてまず留意すべき点であるといえる。本グループのメンバーが表現したグループへの期待を整理してみると「情報を得たい—情報希求的」、「同世代の人と話したい—対人希求的」に集約される。思春期の不登校生徒を対象とする場合には、メンバーは参加への期待をはっきりと言語化できるわけではないが、ファシリテーターはその思いを汲み取りながら、必要な情報を提供し、グループの空間がメンバーにとって自由に話ができる状況、すなわち心理的に安全な空間となるよう配慮する必要がある。

(2) グループの安全感

本グループは、継続型の半クローズドグループである。1週間に1度、1時間という枠は、いわゆる「居場所」としては充分でなく、日常生活にまで繋がるような友だちづくりという点でもあまり役にたたなかった。適応指導教室等でよく行われるキャンプや野外の活動もなく、コラージュや描画、作品づくりといった表現療法もいっさいとりいれていない。言語化が未熟といわれる思春期の生徒を対象としながらも、言葉のみでグループは進み、グループリーダーとしての筆者の立場は、エンカウンター・グループのファシリテーターとしての役割であった。

前述したように、メンバーはグループ参加にあたって、期待と同時に「緊張する」（Fさん）や「人と話す時には壁がある感じ」（Dさん）のように見知らぬ人への不安や不気味さをも抱えていた。しかし、本グループの場合、メンバーはファシリテーターと個別のカウンセリング関係があり、そのファシリテーターも参加しているグループということで、単に紹介されて参加するグループよりは安全感が高かったものと推測される。また、グループが始まってからの安全感もカウンセラーとしての筆者との関係性を基盤としていた。通常のエンカウンター・グループでは、ファシリテーターはそのリーダーシップをメンバーに分散するが（安部1981）⁹⁾、本グループにおいてはグループの中心からファシリテーターは離れることがなかなかできなかった。メンバー相互の直接的な会話になりにくく、ファシリテーターが仲介者としての役割をとらざるを得ず、ファシリテーターを中心として、いわば扇型に広がったグループであったといえる。これは、本グループのメンバーが不登校という問題を抱えたクライエントであり、その対人関係のあり方は一般的なエンカウンター・グループのメンバーのようにはいかないことが主な要因であったと思われる。不登校の生徒を対象

とした本グループ事例においては、ファシリテーターと各メンバーとの間に作り出された安全感がグループ全体に広がっていったものと考えられる。すなわち、ひとりのメンバーとファシリテーターとのやりとりを他のメンバーは観察し、表現や受け止め方を学んでいったのである。メンバーがそれぞれ他者を理解し、受け入れる能力を身につけることが出来るようになるまでは、各メンバーの話をしっかり受けとめていくのは、主にファシリテーターの役割であったと言えるだろう。

(3) グループの中で話すことの意味

ベーシック・エンカウンター・グループのプロセスは村山・野島(1977)¹⁰⁾の発展段階がよく知られている。段階Ⅰ：当惑・模索、段階Ⅱ：グループの目的・同一性の模索、段階Ⅲ：否定的感情の表明、段階Ⅳ：相互信頼の発展、段階Ⅴ：親密感の確立、段階Ⅵ：深い相互信頼と自己直面、として示されているように否定的感情表現の段階を通過して、グループは相互信頼の段階へと発展して行くことが多い。しかし、本グループでは、メンバーが他のメンバーに対して否定的感情を表明することはなかった。本グループの中において「否定的感情」の表明は、メンバーへの否定的感情ではなく、グループメンバー以外の人物や出来事に対する批判という形であらわれた。学校や先生に関する不満、親や友達の無神経さなどがよくやり玉に挙げられた。

思春期のクライエントにおいては、その自我は発達途上にある。そのため、なんらかの危機的状況に直面すると「自分らしさ」を見失わないように、防衛のひとつとして、「こだわり」を強く持つことがあるように思われる。あるべき自分の姿、また自分がやりたいことへのこだわりを持ちつつも、現実場面では満たされることのない思いに立ち往生してしまう様に見えることがある。ひきこもり型不登校生徒への個別の関わりにおいては、山中(1978)¹¹⁾が述べている「窓」、すなわちクライエントの好きな遊び、熱中していること、興味や関心を強く持っているものに、クライエントのこだわりをみつけることが多い。とはいえ、グループの中では複数のメンバーに共通した「窓」はなかなか見つからず、そのため、「自分らしさ」を表現しやすいはずの「好きなこと」の話題は長続きしなかった。つまり、ひとりのメンバーにとってはとても面白いことでも他のひとには興味がないことが多かったのである。そのため、いきおい話題は共通項となりやすい、メンバー以外の人や出来事に対する不満へと向かうことが多々あった。その状況はメンバー個人にとって、言いにくいこと、重要な内面的な話を思いきって話すというニュアンスは少なく、「おしゃべり」に近い印象をファシリテーターは持った。思春期女性のメンバーにと

っては、内容よりもまず「おしゃべり」という行為そのものが大切だったようにも思えた。

本グループのメンバーにとっては、「気持ち」はもちろんのこと、「考え」を複数のひとに話した体験すらこれまで十分ではなかったと推察され、とりあえず「考えを話してみる体験」ができたことは大きな意味があったと思われる。スムーズにいかない現実の人間関係の中ではなかなか「自分らしい」考えを主張しても分かってもらえない、あるいは主張以前にあきらめてしまうことの多かったメンバー達であった。それだけに、グループの中では、泣いたり笑ったりといった強い感情表現はなくても、自分なりの考えを表明してみるといった体験は「自分らしさ」を確認する手段の一つとなったと言えるであろう。

メンバーにとって重要な意味を持つこの体験を、ファシリテーターは大切に、その機会を公平に保証する必要があった。ファシリテーターがリーダーシップを強く発揮することで、ときにはメンバーが機械的な順番で話すようなことも起こり、グループの自発的な流れを損なうことにもなりかねないが、その危険にも増してメンバーの「話してみる」体験の意義は大きいように思われた。

メンバーは不満を話す以外にも、様々なことをグループの中で話題にした。まず、進路のことは皆にとって関心事であったため、情報の交換、受験に対する不安等が多く語られた。このほか、来談するときの大変さ、体力をどう維持するかということ、また、日常生活については、お金の使い方、食事の好み、ファッションやペットの事等、その内容は多岐にわたった。ある時、話題が「親友」ということになった。現実の世界では友だちがいないGさんであったが、「一生つきあえる人だと思う」と言い、また「親友」ということばに理想をもとめ、かなわぬ現実に幻滅していたDさんは「親友なんて、作るのは無理」と語った。自分の考えを話しながら、この時メンバーは、押しつけられる形ではなく、同世代の考えに触れていく機会を持つことにもなったのである。

(4) メンバーの援助体験

グループの中で話したことが、他のメンバーの参考になったり、励みとなることはセルフ・ヘルプ・グループの中ではしばしば見られることである。本グループにおいても同様なことが時々生じ、そのような体験を持ったメンバーは活き活きとした語り口となっていた。本グループは、前述したように、グループそのものの体験として満足度が高かったとは言えないだろう。満足度の高いグループは、メンバー同士の信頼感や一体感が強まるものである。しかし、本グループでは、メンバーは決まった時間の中では話をしても、

部屋を出れば廊下でさえ、口を聴かない状態であった。わずかに、EさんとFさんは「おしゃべり」という共通の興味からグループセッション以外でも、帰宅時に行動をともにすることがあったが、日常的な友人関係へ発展することはなかった。

しかし、本グループの対人関係に関わる効果のひとつとして、メンバーを「他者への援助体験」へと導くことがあったことは重要な点であると言えるだろう。

グループ経過のうち、第一期におけるBさんは、カウンセラーとの個別面接の時よりAさんと話すときの方が多弁であった。年下のAさんから話を聞きたいといわれたこともあるのであろう。胃が痛いと言えながらも、頼られることはBさんにとって誇らしいことであつたと思われる。もともと道路にポイ捨てしてあるごみを拾って帰ったり、傍若無人な若者に腹をたてたりと、超自我の強い傾向にあるBさんにとって、姉貴的な役割をとることができたのは、自己イメージにかなつたものであつたと推察された。

また、Cさんは、グループを途中でやめて、個別面接のみとなったわけであるが、その終結期に、自分の好きな曲の入ったテープを「他の人にも聞かせて」と、カウンセラーに託した。それは、あるアニメの声優の歌う、心を励ます内容の歌詞がついた優しいメロディーの音楽であった。Cさんは「自分もこれを聞いて元気がでた」と話していた。この歌は、Dさんの耳に届き、Dさんがグループに参加するきっかけのひとつとなった。さらに、Eさんの場合は、高校に進学した後、時々グループに寄っては高校生活に関する情報を他のメンバーに提供していた。

このようなメンバーの行動は、他のグループメンバーとの出会いの中で生まれてきたものであつた。グループでは「他者に対する援助の意志を引き出すこと」ことが可能であるが、それはささやかな思いつきであつたり、ちょっとした情報提供から始まるように思われた。そのような行動の意味をファシリテーターが理解し、メンバーにフィードバックしていくことは、メンバーの自己評価を高めることに繋がるであろう。

本グループ事例は、最初から明確な実施計画があつたわけではない。スクール・カウンセリングの現場ではそのような事態は多々みられることである。それだけにファシリテーターには、まずグループの中におけるメンバーの心理的安全感を保障することが求められる。その上になつて、メンバーは「グループの中で話す体験」や「援助体験」を持つことが可能となる。そのような体験をメンバーに提供できるグループは、メンバーの心理的成長へ寄与することになると期待される。

4. 付記

本論文は日本心理臨床学会第20回大会にて発表したグループ事例研究に加筆・修正したものである。当日、座長の労をとっていただきました神奈川大学の下田節夫先生、貴重な助言を頂きましたフロアの先生方、また発表を了解して頂いたグループメンバーの皆さんに感謝の意を表します。

5. 引用文献

- 1) 安部順子「臨床心理士による訪問面接—訪問に対するクライアントの心理的抵抗に関する一考察」、『九州社会福祉研究26号』, 21-31, 2001
- 2) 白井聖子「高等学校におけるグループ・アプローチ」,(野島一彦編) グループ・アプローチ, 現代のエスプリ, 385号, 81-89, 至文堂, 1999
- 3) 本山智敬, 野島一彦「高校生を対象とした非構成的エンカウンター・グループの一事例」, 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 第43巻(第1号第2号合併号), 281—291, 1998
- 4) 國分康孝編 「構成的グループ・エンカウンター」, 誠誠書房, 1992
- 5) 水上和夫「小学校におけるグループ・アプローチ」,(野島一彦編) 現代のエスプリ, 385号, 60-72, 至文堂, 1999
- 6) 北原福二「中学校におけるグループ・アプローチ」,(野島一彦編) 現代のエスプリ, 385号, 73-80, 至文堂, 1999
- 7) 安部恒久「スクール・カウンセラーとグループ・アプローチ」,(野島一彦編) 現代のエスプリ, 385号, 305-313, 至文堂, 1999
- 8) 中田行重「エンカウンター・グループのファシリテーションについての一考察」, 心理臨床学研究, 10(3), 53-64, 1993
- 9) 安部恒久「エンカウンター・グループにおけるファシリテーターに関する研究」, 中村学園研究紀要, 15号, 1-15, 1982
- 10) 村山正治, 野島一彦「エンカウンター・グループ・プロセスの発展段階」, 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 21(2), 77-84, 1977
- 11) 山中康裕「思春期内閉」(中井久夫, 山中康裕編)『思春期の精神病理と治療』, 岩崎学術出版社, 17-62, 1978